

(言語活動の充実)

豊かな心で、自ら考え判断し、すすんで行動する子どもの育成
子どもの主体的・対話的な学びをもとに、手応えや達成感を感じる授業の創造
～言語活動の充実を図る指導方法の研究～

大阪市立大江小学校 研究部

1. はじめに

本校では、数年来「生きる力」の育成をめざし、学校教育目標である「豊かな心で、自ら考え判断し、すすんで行動する子どもの育成」を主題に研究を進めている。昨年度からは、上記のような研究主題を設定し、「主体的な学び・対話的な学び」について研究を進めている。特に教科は指定せず、各教科の目標達成のために、様々な学習活動において言語活動をどのように位置づけ、実践していくのか考えてきた。

2. 研究の視点

本校の課題の一つとして、先生や友達の話をしっかり聞いて、じっくり考えていこうとする力の不十分さが考えられる。そのような力をつけていくためには、「話す」「聞く」「書く」といった基本的な言語活動に着目し、1時間の学習の中でそのような機会や場面を多く設定した授業を展開していきたいと考えた。

そこで、「子供の主体的・対話的な学びをもとに、手応えや達成感を感じる授業の創造」という主題に迫るため、以下の3つの柱を設定した。

- (1) 課題発見・解決を念頭においた「深い学び」を大切にした授業の創造
- (2) 友達と共働し、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」を大切にした授業の創造
- (3) 見通しを持って、粘り強く解決に取り組む「主体的な学び」を大切にした授業の創造

このためには、言語活動の充実は不可欠となるため、以下の具体的な5つの視点をもとに研究を進めていく。

1. 事実等を正確に理解する。(基礎・基本の充実)
2. 他者に的確にわかりやすく伝える。(コミュニケーション能力の育成)
3. 事実などを解釈し、説明することにより、自分の考えを深める。
(深い学びの創造)
4. 考えを伝え合うことで、自分や集団の考えを発展させる。
(協働的な学び)
5. 互いの存在について、理解を深め、尊重していく。
(課題の道徳観の育成)

3. 研究の内容

(1) めざす子ども像

「知っていること・できることをどう使うか」などの資質・能力を育むための具体的な改善の方策の一つが「主体的で対話的な深い学び」であると考えた。例

えば、その学習時間の課題を指導者が「今日の課題はこれ」と提示するのではなく、「前時までの学習で何を学んだのか」「この時間は何が課題となるのか」「それを解決するためには、何をどんな方法で考え、工夫していけばよいのか」といったように、児童の思考が活性化し、真剣に課題に立ち向かえる状況が授業内で行われるかが大切であると考えた。そうすることで、授業に主体的に取り組む児童が増え、一人一人が課題を意識した学習につなげることができた。しかし、言語活動を指導計画の中でどのように位置づけ、より効果的な活動にしていくための検証を進めていく必要がある。

そこで、今年度も課題を見つけ、解決に向けて活動を進める中で、子供たちが意欲的に取り組んでいける授業をめざしていくことが大切だと考えた。各単元・各時間の学習を通して、子どもたちの関心意欲の高まりを感じられれば、自然と次時の課題が見つかったり、次単元への学習の動機づけになったりすると考えた。また、話し合い活動を単に取り入れるだけでなく、「何のために」「その根拠は何か」「その時間、またはその単元のゴール地点は何なのか」といった学習の見通しを持たせていく。その上で、効果的な言語活動をどのように設定し、めあてを達成していくのかに重点を置き、主体的・対話的な学びにつなげていくことにした。

(2) 指導の実際

- ・社会科の実践（3年）
 - ・単元導入時の自分の生活体験の交流→学習計画の作成
 - ・調べる活動をもとにした意見交流
- ・国語科の実践（4年）
 - ・単元導入時の工夫→本の紹介ポップ、イメージ化、並行読書
 - ・授業の進め方の工夫→全体読み、読み取る観点を示す、小集団や全体での話し合い活動

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

- ・単元を通して、子供たちの意欲の持続を図れた。

単元の導入時に、子供たちの疑問に沿った学習課題を設定し、学習計画を立てた。そうすることで学習計画は子供の思考に沿ったものとなり、高い意欲を維持したまま、主体的に学習を進めることができた。

- ・ペアやグループでの意見交流の場を設けたことが対話的で深い学びへとつながった。

社会科では「資料から調べる」国語科では「本文から読み取る」ことでまず自分の考えを持つことを大切にしてきた。その上で、意見交流を行うことで自分の意見との相違点がよくわかり、新たな気づきや発見が考えを深めていく手立てとなった。

(2) 課題

- ・教科での学びを日常生活に活かすこと

学習内容が生きたものになるためには、学んだことが日常生活の中でいかに

生かせるかということである。教室での学習が学校の中だけのものでなく、子供たちが過ごす社会の中で自然と活用していけるような力を今後もつけていく必要がある。

- ・深い学びが実現できる交流活動のさらなる深化・充実をめざすこと

話し合いの言語活動がより充実したものになるために、「何のために話し合うのか」「何を伝え合うのか」といった目的を子供たちがしっかりと理解する必要がある。リーダーが中心に話すような班活動ではなく、目的や意図を十分に理解した交流活動を展開していけるよう、今後もさらなる研究を進めていかなければならない。